



TITLE:

<ことば>のデザイン 伝わらない
<ことば>を巡って

AUTHOR(S):

荒牧, 英治

CITATION:

荒牧, 英治. <ことば>のデザイン 伝わらない<ことば>を巡って. デザイン学論考 2014, 1: 14-17

ISSUE DATE:

2014-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/218095>

RIGHT:

＜ことば＞のデザイン

伝わらない＜ことば＞を巡って

Design of <Language>: Language goes on non-hearing ears

荒牧 英治

ARAMAKI, Eiji

京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット特定准教授



昔からいつも気になっていることがあった。「それは、まわりの人達が認識している世界と自分が認識している世界は同じなのだろうか？」ということだ。我々はこれを確かめるために、さまざま言葉を交わす。

「ありがとう」

「会えて嬉しい」

「愛しています」

たくさんの言葉がある。しかし、ときどき不思議になる。まわりの人達が使っている言葉と私の言葉は同一なのだろうか？ 研究のため、あるいは何気ない日常で、例えば、電車に乗っている時、横断歩道を待っている時、喫茶店でコーヒーを飲んでいる時、エレベーターの中で、この問いは常に生じる。いったい、みんなは、何を伝えようとしているのだろうか？

これを確かめるために、多くの試みがなされてきたことを知っている。生物学、物理学、はては、文学からも、それはもう膨大な数の試みがなされてきた。恐らく、答えは得られないだろう。しかし、この問いは、だれもが、一度は挑んでみる価値がある問いだと思っている。この問いは、立っている世界を足元から、ぐにやりと揺るがすような気にさせてくれる。ごく当たり前の日常に懐疑的なスパイスを持ち込んでくれる。

何か新しい答えにたどり着くとは到底思えないが、尊敬する先生、友人の忠告に従い、いくつかの試行について書いてみることにした。

＜ことば＞と色

色についてWikipediaは以下のようにいう。

ある1つの色名が指し示す色のイメージにはある程度の幅があり、その幅

は色名によっても様々に異なる。例えば、赤という色は可視光線のうち620nm付近を中心として約600～780nm程度の波長領域に相当すると言えるが、この中には橙や紫に限りなく近いものまで含まれる。

色名と実際の色の対応は諸言語や個人間においても差があり、これには文化圏や生活環境が大きく影響していると考えられる。

Wikipedia access date 2014/07/06

ここで色と文化圏にまつわる興味深い一例として、ヒンバ族を挙げてみたい。ヒンバ族は、ナミビア北部のクネネ州に住んでいる民族であり、牛と山羊を育てて生活している。なぜ、ヒンバ族をあげたのかというと、彼／彼女らの色の呼び方が特殊だからである。色をどう呼んでいるか図上に配置した報告がある（図1上）ⁱ。英語の色配置（図1下）と比べてみると興味深いことに、彼らは緑色を持たない。かわりに、「burou」という語が緑と青の両方をカバーしている。

同様の現象は、かつての日本においてもあったようである。今でも、青の範囲は欧米に比べて大きく、緑色なのに「青信号」、緑色なのに「青物野菜」と言ったりする。では、異なる両者がコミュニケーションすると、何が起こるだろうか？

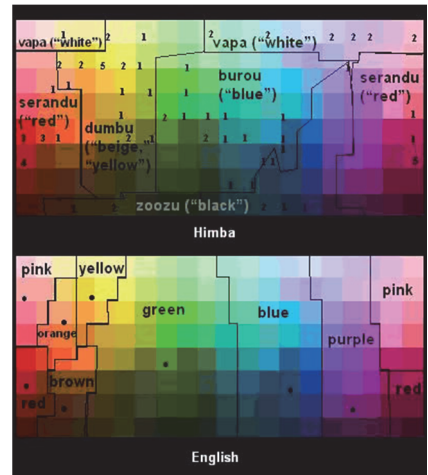


図1 (上)ヒンバ族の色の名前、
(下)英語における色の名前。

Aさん「「緑」だと思っていました」

Bさん「私としては、「青」かなア。このままではやりとりが不便ですね。今度から、「青」と呼んでくれませんか？」

Aさん「あなたの方こそ、「緑」という色を覚えて下さい」

名前は難しい。強制すると喧嘩になりそうだし、お互いに相手を尊重して、相手の名前を採用すると、名前が入れ替わって元の木阿弥である。

伝わらない＜ことば＞が産むモンスター

異なる色の名前をした。次に、＜ことば＞が伝わらない場合の不便をみてる。病院でよく聞く言葉で「寛解（かんかい）」という言葉がある。

あまり耳に馴染みのない言葉である。この聞き慣れない言葉は何をさすのだ

ⁱ Roberson, Debi, Davidoff, Jules B., Davies, Ian R. L. and Shapiro, Laura R. Color categories: Evidence for the cultural relativity hypothesis. Cognitive Psychology, 50(4), pp. 378-411, 2005.

ろうか？これはしばしば、癌などの病気が＜治った＞ものとして理解されるようであるⁱⁱ。

しかし、実際の意味は、「病気の症状が一時的に軽くなったり、消えたりした状態」であり、決して＜治った＞ということを指すわけではない。

Aさん「先生、治ったとおっしゃったじゃありませんか！」

B医師「治ったとは言っていない。＜寛解＞したとはお伝えしましたが…」

このようなちょっとした言葉の誤解がモンスター・ペイシエントを産むかもしれない。そこで、いかに、言葉で伝わらないことが多いか、簡単な実験を行った。

図2に示したのは、Wikipediaの「兎」の外見に関する記述であるが、ある仕掛けが施されている。文中の「兎」という文字がすべて別の名前、ここでは、「ギガゼブギガス」に置換されているのだ。これを配布して、どんな外見の動物か学生に描いてもらった。

もし、Wikipediaが正しく「兎」の外見の特長を記述できていれば、絵の上手い下手はあれど、兎と類似した動物が描かれるはずである。しかし、なんたることか、描き出された動物は、なんとも怪物地味な形相のモンスターばかりであったのだ（図2）。信じていただきたいのは、特に珍妙なものだけを選んだわけではないということだ。

あの愛くるしい「兎」の何が伝わらないのだろうか？ 学生の絵に共通するのは長く伸びた牙。これは、「門歯は発達し、一生のびつづける」という表現に反応したものと思われる。一生のびつづけるのであれば、地面に達するくらい長くなることもあるかもしれない。また、「ギガゼブギガス」という名前の恐ろしさも影響しているかもしれない。しかし、「ギガゼブギガス」は、なぜ恐ろしそうな響きを

全身が柔らかい体毛で覆われている小型獣である。最大種はギガゼブギガスで体長50-76 cm。毛色は品種改良もあって色も長さも多彩である。多くの種の体毛の色彩は、背面は褐色、灰色、黒、白、茶色、赤茶色、ぶち模様などで、腹面は淡褐色や白。他の獣と比しての特徴としては、耳介が大型なことが挙げられる。ゼブギガス目内では耳介があまり発達していない種でも、他の哺乳綱の分類群との比較においては耳介比率が大きいといえる。また、音や風のするほうへ耳の正面が向くよう、耳介は可動することができる。また、毛細血管が透けて見えるこの大きな耳介を風にあてることで体温調節に役立てるともいう。眼は頭部の上部側面にあり広い視野を確保することができ、夜間や薄明薄暮時の活動に適している。鼻には縦に割れ目があり、上部の皮膚を可動させることで鼻孔を開閉することができる。門歯は発達し、一生伸びつづける。

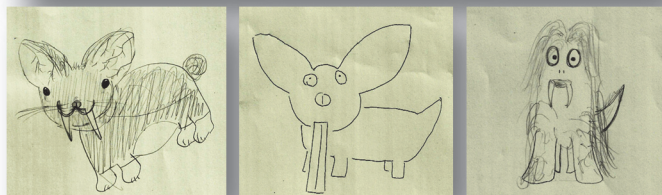


図2 (上)刺激文章, (下)描画された図

ⁱⁱ 「病院の言葉を分かりやすく－工夫の提案－」 国立国語研究所「病院の言葉」委員会、勁草書房 2009.

持つのだろうか？ これについては，次号以降，考察したい．

「デザイン学」への問い

+ 循環器をデザインする

+ 「だけでいい」デザイン